ふり遊びとプロジェクション
Pretend Play and the Projection

田中 彰吾
Shogo Tanaka

東海大学
Tokai University
shogot@tokai-u.jp

Abstract
This article aims to consider infant's act of pretend play and the projection of mental representations included in it. During a pretend play, the player deals with the situation in an "as-if" mode (e.g. child talking to a banana as if it were a phone). We trace back the development of infants' as-if mode of acting and explicate how the imaginary represented world are projected onto the reality. Although it has been regarded that the pretense play is based only on the secondary/imaginary representations, we point out that the very primary/perceptual representations of objects are also constructed through the early pretense play of infants.

Keywords — Pretend Play, Projection Science

1. はじめに

子どもは発達の過程でさまざまな「ふり遊び（pretend play）」を実践する．たとえば，積木をミニカーに見立てて走らせる，という遊びもそのひとつである．遊んでいる幼児は，自分が手にしている積木がミニカーと同じものではないことを理解しているが，それがあたかも実物のミニカーであるかのように扱うことで，この遊びは成立している．

ふり遊びにおいては，比較的わかりやすいしかたでプロジェクションが生じていると言ってよい．幼児は，積木が積木であるような知覚的現実を前にしているが，その現実に対して，積木をミニカーとして走らせることのできる空想的世界を重ね合わせているからである．以下では，「ふり遊び」において生じている事態を幼児の発達過程に沿って概観するとともに，そこで生じているプロジェクションについて考察する．また，それと同時に，ふり遊びを題材にしてプロジェクションの概念についても改めて考察する．

2. ふり遊びの概念

広く受け入れられている見方にしたがうと，ふり遊びは，「あたかも（as if）」という構えによって特徴づけられる一連の行為を含む遊びである（Garvey, 1990）．たとえば，空き箱をあたかも家であるかのように見立ててそこにぬいぐるみを寝かせる，あたかも台所であるかのように砂場を使ってままごと遊びをする，絵本に描かれた果物をあたかも現実の果物であるかのように手でつかむふりをして口に運ぶ，といった行為である．つまり，想像された状況の中にあたかも自分がいるかのように振る舞いながら遊ぶのである．したがって，ふり遊びを実践する幼児は，現実とは別の可能性として心的に表象されたものを，現在の状況に対して意図的に投射していると考えられる（Lillard, 1993）．

この点に関連して，Leslie（1987）は，ふり遊びの実践が幼児の「メタ表象」の能力によって支えられていると指摘した．Leslie によると，バナナを電話の受話器に見立てて話しかけるという類のふり遊びは，しばしば他者との相互作用という文脈において実践される．たとえば，母親がバナナを耳にあてて話しかける様子を子どもが見て，それをふり遊びだと理解できるには，バナナについての知覚的な一次表象をバナナから引き離し，電話を表現する二次表象として利用できる必要がある．そうでなければ，幼児はたんにバナナと電話を混同していることになる．この点で，ふり遊びはメタ表象の能力に支えられているというのである．

また，このようなメタ表象の能力は，「目の前にバナナがある」という知覚的世界だけではなく，「母親はバナナを電話として扱っている」という母親の心的世界についても，幼児が萌芽的に理解していることを意味するだろう．この点で，ふり遊びの理解は，他者の心的世界を理解するための「心の理論」（Premack & Woodruff, 1978）を支える先駆的能力を構成するものでもある，と Leslie（1987）は加えて指摘している．

3. 発達初期のふり遊びと一次表象

ふり遊びを概念的に分析するとおおよそ以上のように整理することが可能だが，発達過程に沿ってふり遊びの起源をたどり直すと，やや異なる様子が見えてくる．Reddy（2008）によると，生後 9 ヶ月ごろの幼児は，物を差し出してわざと引っ込めるといったように，対人場面で相手をからかって喜ぶ反応を見せる．言い

かえると，相手に物を渡す「ふり」をしながら実際には渡さず，予測を裏切られた相手の反応を楽しむということである．この行為は生後２年目に現れる「見立て遊び」より早く，また，対物的な場面ではなく対人的な相互作用において現れる．麻生（1996）は，この行為が後にふり遊びに発展する最初期の段階であるとして，「コミュニケーション行為としてのふり」と名づけている．言いかえると，発達の最初期に着眼する限り，ふり遊びは，物理的対象に向けられているわけではない．コミュニケーション場面において自己の意図をいわば偽装することで，相手の反応を引き出すことに向けられているのである．

生後１年前後に見られるようになるのが，行為の模倣としてのふりである．たとえば，空のコップに口をつけて飲むふりをする，絵に描かれた果物をつかんで食べるふりをする，といった行為である．麻生（1996）は，行為の模倣として現れるこうした初期のふり行為は，メタ表象を必要とするものではないと指摘している．むしろ，生後１年のこの時期は，メタ表象を形成する能力以前に，「飲む行為の対象としてのコップ」や「食べる行為の対象としての果物」という一次表象を形成する段階であり，これらは，Bruner（1966）が表象発達の第一段階として提起した「動作的表象（enactive representation）」に該当するという．麻生は，Leslie がしばしば引き合いに出すバナナの電話の例についてこう述べている–「それは，「電話」の動作的表象を獲得することを意味しているのであって，バナナを電話のシンボルとして用いることができることを意味しているのではない」（p. 46）．

4. 考察

以上の発達過程を踏まえると，ふり遊びは知覚的対象に想像的対象を重ね合わせるメタ表象的能力を前提とする以前に，そもそも一次表象を形成する能力の発端であると考える必要がある．また，この初期段階で幼児が実践しているのは，知覚された対象に対して，行為の可能性を投射するということであろう．メタ表象以前に，一次表象そのものが，現実の行為が実現できないにもかかわらず行為の可能性をそこに投射できる知覚的対象として現れる何かなのである．知覚的現実は，実行できる行為と，可能性にとどまる行為の双方に対応して現れるとき，投射された一次表象として経験される．

こうした最初期のふり遊びに対して，見立て遊びやごっこ遊びとして生じてくるような本来のふり遊びは，(a)「脱文脈化」や(b)「物の見立て」という要因を含んでいる（高橋, 1993）．脱文脈化とは，寝る時間や寝る場所ではない文脈で寝るふりをするように，本来の文脈とは違った文脈でその行為を再現することである．また，物の見立ては，そこに存在しないものをあたかも存在するかのように見立てて利用することである（たとえば空のコップをふーふーと吹く動作など）．つまり，心的に想像される世界を，目の前の知覚的現実へと重ね合わせるような投射が生じる必要がある．

本来のふり遊びが生後 2 年を過ぎる頃にしか出現しないことと，同じ頃に二語文を発話する言語発達が並行して生じることとの間には，大きな関連性があると思われる．名詞的に対象を指示するにとどまる一語文に対して，二語文は「ワンワンいる」「マンマたべる」といった言い方が表しているように，「主語＋述語」の組み合わせで現実を描写でき，ひとつの完結した文脈を構成することができる．おそらく，知覚的現実の文脈から離れたところで発せられる二語文は，心的に想像される世界を指示することができるのである．

さらなる検討が必要だが，さしあたりここでは以下の可能性を指摘しておきたい．二語文の成立とともに想像的世界が自律性を持ち始め，それが改めて知覚的現実へと投射されるときに，脱文脈化や見立てをともなう本来のふり遊びが可能になるのであろう．また，言語発達とともに萌芽的な想像的世界が形成されることではじめて，メタ表象が知覚的現実へと投射され，ふり遊びに特有のプロジェクションが生じていると思われる．

参考文献

[1] 麻布武，（1996）ファンタジーと現実．金子書房.
[2] Bruner, J. (1966) Studies in cognitive growth, Oxford, UK: Wiley.
[3] Garvey, C. (1990) Play (2nd ed.). Cambridge, MA: Harvard University Press.
[4] Leslie, A. (1987) Pretense and representation: The origins of 'theory of mind'. *Psychological Review, 94*, 412-426.
[5] Lillard, A. S. (1993) Pretend play skills and the child's theory of mind. *Child Development, 64*, pp. 348–371.
[6] Premack, D., & Woodruff, G. (1978) Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences, 4*, pp. 515-526.
[7] Reddy, V. (2008) How infants know minds. Cambridge, MA: Harvard University Press.
[8] 高橋たまき，（1993）子どものふり遊びの世界．ブレーン出版.